

# 幕府の老中として 天保改革にあたり 日米修好通商条約を締結へ

## 緊縮財政の中 成田山本堂の建立を許可

去る9月3日、4日「伝えよう義民の心、生き方を」と全国義民サミットが宗吾霊堂で行われた。席上、パネリストの中田善三(市文化財保護協会常任理事)から、惣五郎時代の佐倉藩主堀田正信の人物像に新しい視点からの報告があった。さらに二百年後の正睦についても紹介したい。

幕末の嘉永6年(一八五三)9月、佐倉藩主堀田正睦は、成田山本堂(現釈迦堂)の建立に許可を与えた。当時幕府や佐倉藩も緊縮政策をすすめる立場から、新規の寺社建築はできるだけ抑える方針をとっていた。しかし、藩内の民心安定のためにはこの際「許可すべし」と正睦が決断を下したのである。

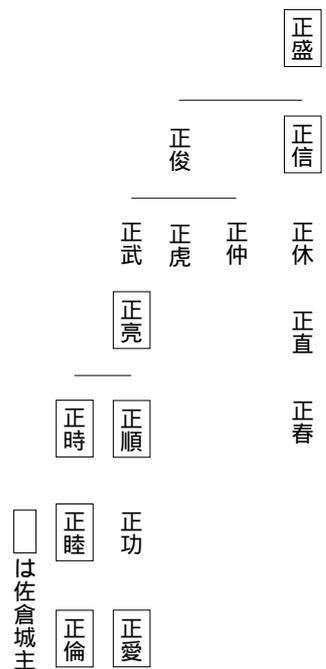
「この本堂の建立については、当時



堀田正睦(ほった まさよし)

16歳で佐倉藩主となり、幕府の老中に。米国の開港通商の求めに応じ、日米修好通商条約を締結する。佐倉藩の改革にも西欧の知識を導入するなど、時代の先をいく藩主であった。

堀田氏系図



参詣客の激増により、本堂が甚だしく狭隘になったため、第十世照阿上人自ら図面を作成されましたが、許可が得られず、第十一世照獄上人に至ってようやく建立計画に許可が得ました(太田次男著、近代成田の礎を築いた先師)という状況であったのである。

工事は6年余りを費やして、安政5年(一八五八)に完成し、8月6日に入仏供養が行われた。

このとき、正睦は、歴代藩主同様同山に50石の寺領を認め、造営には大材4本寄進、人夫800人を搬送に当

たらせ、さらに、本堂落慶の際は白金15枚を寄進した(新修成田山史)

この成田山本堂工事許可の1年前、嘉永5年(一八五二)正睦は、惣五郎(佐倉霊吉)の三回忌を営み、口の明神に木像および影像を造置していた。

### 16歳で

### 佐倉11万石の藩主に

正睦は、文化7年(一八一)8月1日、藩主正時の次男として生まれた。幼名を左源治、後に正篤、正睦と改名

する。

文政7年に藩主正愛の養子となり、同8年に16歳で家督を相続、幕府から佐倉11万石の封を受けた。

同年12月には従五位下相模守に叙任した。

文政12年(一八一八)正睦は、20歳で幕府の奏者番となり、天保8年(一八三七)7月老中となり、同14年8月34歳で老中をやめるまで、実に15年間幕政上に重要な地位を占めている。

しかし、老中筆頭の水野忠邦らと天保の改革に当たり、相当な手腕を發揮しながらも、正睦を老中に推薦したはずの忠邦と性格が合わず、正睦は老中を罷免される。

### 米国から

### 開国をせまられる

安政2年(一八五五)10月、46歳になつていた正睦は、再度、老中首座を

命せられ勝手掛に任じられる。

折しもペリーの浦賀来航で、米国の開港通商の求めに対し、幕閣は鎖国攘夷か開国かで大きく揺れ動いていた。

同3年10月、正睦は外国掛（外交事務を掌握し得る地位、今日の外務大臣よりも権限は大きい）に任せられ、同5年6月、49歳でやめる日まで4年間、心血を注いでこの政務に没頭する。

「当時、正睦の外交方針は、攘夷鎖港論には反対で、貿易互市を根底にした富国強兵論を説いていた。ハリスは自ら起草した開港通商条約の草稿を正睦に呈したので正睦は条文の検討、翻訳を行い日米修好通商条約14カ条、貿易章程7則が妥結された」（篠丸頼彦著「佐倉の歴史」）

しかし諸大名、三奉行、海防掛の大部分は反対であった。

正睦はやむなく条約調印を2カ月延期し、京都に行き孝明天皇に拝謁、勅許の上奏文を呈した。安政5年（一八五八）2月のことである。

しかし、京都御所にはすでに攘夷派の薩長勢力の手が及んでおり待つこと1カ月余り、「もう一度相談して出直すよ」といった天皇の返答で勅許は下されなかった。

一方、幕府内では將軍家定の後継者をめぐる争いが起こり、大老井伊直弼と正睦の対立があった。井伊直弼は、

勅許を得られないまま6月19日日米修好通商条約に調印、さらに6月23日、正睦の老中を罷免し、同25日に將軍世継ぎに家茂を決定、公表した。

万延元年（一八六〇）3月3日、井伊直弼は雪の降りしきる江戸城桜田門外で、水戸浪士らの手によって暗殺された。正睦隠居（一八五九）翌年のことである。

### 佐倉藩の改革に 西欧の知識を導入

正睦は、中央の政治舞台では、二度までも罷免の悲運に会ったが、佐倉藩においてみせた藩政改革は、常に時代の先端をいくものであった。

佐倉藩は天保4年（一八三三）幕府の天保の改革に先立つこと8年前、文武芸術の制をたてている。

次いで農民、農村対策では勸農策として勸農掛を下級武士から任命し、村方には百姓から勸農の役を置いた。人口増策（農業生産維持のため）では、「陰徳講」を取り立て、「子育教諭宣書」を出した。

さらに学制改革として海外の知識導入を活発に行なった。

藩校、成徳書院の新築（天保7年）、藩校の図書として蘭書リンネ全集37巻の購入（天保10年）。

藩に洋式砲術を取り入れ、兼松繁茂を高島流砲術指南とする（天保13年）。

さらに蘭医佐藤泰然を招き、蘭外科順天堂医院が栄えた（天保14年）。

藩で牛痘による種痘を初めて実施する（嘉永3年）。

藩の蘭字書「新撰洋字年表」に江戸在住蘭学者58名をあげる（安政2年）。以上のように佐倉藩における正睦は

蘭癖（なんびく）なんでもオランダなどから入ってきた西欧の学問に頼る風潮）とやゆされながらも、西の長崎、東の佐倉といわれたように、いち早く西欧の文明を受け入れ、わが国の文明開化に尽くした役割は大きなものがあった。

正睦の人物論については、「正睦色浅黒く身体肥満にして弁舌甚だ巧みならず、性格温和にして憂鬱色に形われず、一言にしてこれを評すれば思慮は密にして実行に敏なり」と紹介している。

「堀田正睦」大正11年千葉県内務部発行）  
趣味といえは、幼少のころより小鳥を愛養し、詩歌をよくし、俳句をも好んでいた。

また、幕閣にあるときも軽妙な川柳をつくって列座の空気を和ませることも得意であった。

四ツ谷道（かすか）馬を呑んでいるの一句も駄馬が首を吠に入れてえさを食べている光景が面白く目に浮かんで



佐藤泰然を招いて開いた順天堂医院

くる。

元治元年（一八六四）3月21日、堀田正睦は、佐倉城中三の丸御殿で波乱に富んだその生涯を閉じた。行年56歳。歴代藩主とともに佐倉县大寺に葬られている。

法号を文明院見山静心哲恵という。時代は超えて平成14年には、宗吾350回忌に当たり、堀田家12代当主正久（元佐倉市長）も健在である。この回り合わせの年を意義ある年にしたいものである。（文中敬称略）